様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：２３８０３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１５９９４

研究課題名（和文）在宅ケアの安全性を高めるチームワーク構築と向上のプログラム構築の研究

研究課題名（英文）A study for developing the program of teamwork building to improve safety in aged care settings

研究代表者
金澤　寛明（KANAZAWA, Hiroaki）

静岡県立大学・看護学部・教授

研究者番号：４０２１４４３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、我が国の高齢者ケアにおけるチームワークの構成要素とそれらを統合し具体化するためのアプローチを明確化、具体化し、その有効性の検証を行うことを目的とした。
　その具体的内容は、高齢者ケアにおけるチームワーク構築に関する既存プログラムの検討を実施し、チームワークの構成要素の論点の整理を行った。さらに海外の先行知見に基づいた、暫定的な日本語版を作成しその検証を行った。検証に際しては、その内容の妥当性等を中心に実施した。最終的に、本研究において構築された高齢者ケアにおけるチームワーク構築プログラムを、より広範囲な形で現場等において検証することにより、その有用性の検証が可能なものとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　今後、その利用が増大することが考えられる高齢者ケアの安全性を高めていくことは、現在の利用者にとって意義があるばかりではなく、国民の多くにとって重要なことであるといえる。さらに高齢者ケアの特殊な環境下においてケアを提供する際に、関係者間での適切なチームワークが構築されていない場合には、ケアに関わる関係者らを孤立させ、当事者らに多大なストレスを生じさせ、その結果として、ケアに関わる者らの離職やケアの対象者への虐待などが生じる危険性がある。在宅ケアにおいて今後、生じる可能性の高い、こうした危険性に対して、本研究は適切なチームワーク構築の具体的な方策を提示するものである。

研究成果の概要（英文）：This study has a purpose to make clear components of team building in aged care settings and to make an effective program to improve safety for elderly people in such settings through integrating these components of team building. To reach the goal, we have gathered information of outcomes of previous researches and made an arrangement of points of these outcomes of previous researches. Then, we have tried to make a tentative program for effective teamwork building based on these knowledges and verified its validity to Japanese contexts. Finally, it would be possible to try to adapt this program in Japanese aged care settings.

研究分野：医療安全

キーワード：在宅ケア　チームワーク　安全

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

我が国においては、急激な高齢化の進展にともなって、高齢者に対するケアを施設から在宅へとシフトさせようとする動きが現実的なものとなってきている。こうした動きは、我が国のみならず、他の先進諸国においても、同様の動きが見られるが、こうした状況の中で、重要な課題として指摘されているのが、在宅の場における医療と介護の狭間から生じる両者の連携や統合といった課題であった。こうした課題は在宅において提供されるケアの質に直結するのみならず、その安全性にも重大な問題を引き起こす可能性が現在においてもある。

近年､医療分野を中心に多職種からなる業務の連携や統合を担保し､安全性を高めるために、チームワークに焦点をあて、その基本認識と具体的な対応力を構築することに高い関心が集まってきている。たとえばアメリカにおいては、連邦厚生省などを中心に、医療や介護における多職種間の連携強化と安全性の向上を目指す様々なプログラムが示されてきており、こうした状況はカナダなどにおいても見られる状況でもある。

我が国においては、これまで医療分野を中心に安全性向上に向けた取り組みは見られてきたが、主としてそれらは組織を前提としたものであり、今後我が国において増大することが予想される在宅などの非施設でのケアにおける安全性の確保は重大な課題であり、そのための基盤として多職種チームワークに関する実証的な検討やその実践的展開には十分な進展は見られない状況にあった。

また研究代表者らは、医療分野における多職種連携の推進を主眼とする教育研究プログラムを展開するなかで、在宅ケア等における多職種からなるチームワークの構築と安全性の確保が極めて重大な課題であるとの認識を持ち、本研究への着想に至ったのであるが、海外における医療分野に関する事故発生原因の検討においては、事故原因の大部分が、チームワーク不備によるコミュニケーションエラーが寄与しているというエビデンスが示されており、こうした課題への対応としては、当然、チームワークを向上させ、チームを基盤とすることの重要性や必要性を強く意識した。

したがって、我が国の高齢者ケアにおいても、安全性を高め、チームワークの構築やその向上が求められるのであるが、その一方で海外での知見や医療分野での知見をそのまま適応することは、高齢者ケアにおける実態や制度的な差異を見落としてしまうことになり、適切な効果をもたらさないばかりか、むしろ事故のリスクを高めてしまう可能性も高いと考えられた。たとえば、医療分野とは異なり、高齢者在宅ケアの領域においては、チークワークよりも個人の技量や知識が重要視される傾向にあるが、ケアを提供する状況においては、患者を中心に、介護士、医師、看護師、理学療法士、ヘルパー、そして家族など多種多様な関係者が関わっている。さらにこうした様々な関係者が関わる在宅ケアにおいては､その関わりのありようも､様々な関係者が個別に、五月雨的に患者への対応を行っていくという状況にある。つまり、在宅での高齢者ケアの場合、関わる関係者は、時間的に異なるポイントで患者と接点を持つことが多く、いわば提供されるケアが、時間軸を通して複雑に絡み合っていると言える。

したがって、施設での医療や介護よりも、関係者が一堂に会する機会が相対的に少なく、業務が個別化したものとならざるをえない在宅におけるケアの提供の方が、チームワークが著しく欠如しているなどの状況下では、安全性が著しく失われた状態にある可能性も高く、在宅などの「施設でない場」において、多種多様な関係者が関与するチームワークというものを、これまでには無い新たなフレームワークで捉えなおす必要があると言えるのであった。

たとえばチームワークにおける最も重要な構成要素とされる、コミュニケーションに関しても、同一の職場で、同一の課題に従事する、同一の職種にある者の間でのコミュニケーションにおいてさえも、適切なコミュニケーションの手段と形式を踏襲するものでなければ、適切な形でコミュニケーションがなしえないとされる。翻って、高齢者ケアにおいては、複数の機関、様々な職種の関係者が、同時又は異時に業務を行うことを鑑みても、適切なコミュニケーションを成り立たせるための基本的な要件、具体的には状況認知や意思決定のための知識や経験のばらつきが非常に大きく、コミュニケーションの前提として、こうした点を補う何らかの仕組みが必要となる。本研究は、こうした点にまで踏み込んで、高齢者ケアの安全性を高めるチームワーク構築を具体的に可能とする知見を提示するものであった。

２．研究の目的

高齢化の進展に伴い、在宅等における高齢者ケアの重要性が高まっている一方で、医療と介護をはじめ、様々な関係者が関わるケアである、高齢者ケアの安全性に関しては、体系だった施策、方策は十分には検討されていない。また本研究は高齢者ケア領域において安全およびそのためのチームワークに関する実証的な知見を構築する点に特色があり、本研究の知見は、チームワークを通して、今後、増大する在宅ケアの安全性をより一層高め、より安全な社会基盤の構築に寄与しうるものである。

そこで本研究は､多職種が関わる高齢者ケアにおけるチームワーク構築および向上を通して、ケアの安全性を向上させる有効性のあるプログラムの構築を最終的な到達点に、我が国の高齢者ケアにおけるチームワークの構成要素とそれに対応した具体的なアプローチを明確化、具体化し、その有効性の検証を行うことを目的とした。

３．研究の方法

安全性に直結するチームワークのあり方に関しては、様々な産業分野における検討と知見の蓄積が進められてきているが、他分野におけるそうした知見をそのまま適応することは、それぞれの分野の持つ特殊性や文化的基盤といった観点を無視することになり、適切でないばかりか問題が生じる可能性もある。そこで、安全学、産業心理学分野などを中心に安全性とチームワークに関する先行知見の洗出しと整理を実施すると同時に、当該課題に関する進展が大きい、航空領域分野、さらには隣接分野におけるチームワークの要素の抽出と整理を実施し、在宅ケア領域におけるその適応可能性の検討を行った。具体的な方法としては、文献に基づく調査を中心に、必要に応じて、ヒアリング調査を実施した。また公開されている事例等の検討を通して、事故事例にチームワークに関連する要素がどのように関係しているのか検討を行い、在宅ケアにおけるチームワークの課題の検討を行った。

次いで高齢者ケアの特性を加味し、さらに内容の標準化がなされている安全性向上を主眼としたチームワーク構築に関するプログラムに関して、介護施設等における高齢者ケアの安全性向上を意図した、チームワーク構築に関するプログラムである、アメリカ連邦厚生省 Agency Healthcare Research and Quality（以下 AHRQ）の Team STEPPS for Long Term Care の検討を実施した。Team STEPPS for Long Term Care は、現在のところ高齢者ケアの安全性向上を意図したチームワーク構築および向上のためのプログラムとしては、世界的に見て最も包括的かつ先端的なものであるとされ、そうした点から、当該プログラムにおいて議論されているチームワークの構成要素と、前年度に実施したフォーカス・グループインタビューにおいて見出された、チームワークの構成要素を照らし合わせる形を通して、我が国の在宅ケアにおける安全性向上に寄与しうるチームワークの構成要素の検討を進めた。

次いで高齢者ケアにおけるチームワークの構成要素の構築を促し、向上させることとなる、具体的な内容の検討を行った。当該構成要素の同定に際して用いた Team STEPPS for Long Term Care は、たんなるチームワークの知識やコンセプトの解説に留まらず、実践レベルでチームワークの向上を可能とすることが実証的に示されている、具体的なツールをも併せ持つものであり、各構成要素に対応する形で複数のパートから構成され、それぞれを独立した形で用いることが可能なものであった。そこでこの Team STEPPS for Long Term Care の我が国の高齢者ケアにおけるチームワーク構成要素に適合的な部分を利用し、その日本版プログラムの構築を試みた。具体的な作業としては、当該構成要素部分に関して、日本語への翻訳を行い、暫定的な日本語版を作成する。こうした日本語版を元に、研究組織の研究者らを中心に、その内容に関する検討を行い、暫定版の高齢者ケアのチームワーク構築プログラム案を作成した。

最終的に、作成した日本語版プログラムが、実際の現場におけるチームワークの構築や向上に寄与しうるに妥当なものであるかどうかという点に関して、研究組織および研究協力者らにより、その検証を実施した。

４．研究成果

高齢者ケアにおいては、医療および介護専門職間、異なる組織間・セクター間の連携およびコミュニケーションには複雑な課題が多く、特にケアを引き継ぐ際の情報交換が不足している。さらに高齢者ケアサービスの提供を受ける高齢者にはかなり多くの専門分野の異なる医療および介護従事者らが関わっているケースが一般的であり、それぞれの医療従事者らは異なる組織に所属し、異なる場所において主に活動していることも多く、高齢者ケアの連携は極めて困難である可能性が高く、高齢者は複数の異なる内容の指示や説明を受けている可能性もあり、こうしたことが原因で高齢者が指示に従わないため、安全に関わるリスクが発生する可能性も指摘しうる。

こうした点を克服するためにも、本研究の知見は重要であると言えるのであるが、本研究は、多職種が関わる高齢者ケアにおけるチームワーク構築および向上とそれによる安全性の担保を可能とするために、我が国の高齢者ケアにおけるチームワークの構成要素とそれらを統合し具体化するためのアプローチを明確化、具体化し、高齢者ケアのチームワーク構築プログラムを作成し、その有効性の検証を行った。

最終的に当該プログラムが、実際の現場におけるチームワークの構築やその向上に寄与しうるに妥当なものであるかどうかという点に関しては、本研究組織の研究者および高齢者ケアにおける介護者らのケア提供の状況を理解している研究協力者らを中心に検討を行い、その内容の有効性のみに留まらず、その妥当性等の検証を行い、それらはともに肯定的なものであるとの結論に至った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	浦松　雅史 (URAMATSU Masashi) (00617532)	東京医科大学・医学部・准教授 (32645)	
研究分担者	羽生　春夫 (HANYU Haruo) (10228520)	東京医科大学・医学部・主任教授 (32645)	
研究分担者	小松原　明哲 (KOMATSUBARA Akinori) (80178368)	早稲田大学・理工学術院・教授 (32689)	